

八郎湖流域管理研究 第7号の発刊にあたって

八郎湖の生態系全体の姿をとらえることは難しいが、毎年問題となるアオコは一次生産者である藍藻が増えて起きるもので、八郎湖生態系の一端を示す現象である。秋田県八郎湖環境対策室はアオコ発生状況を毎年調査、公表しているが、最近その状況が変化しているように見受けられる。ここ数年アオコ発生時期は6月中旬まで早まっている。一方、目視によるアオコ指標はレベル0からレベル3（湖面にパッチ状に広がった状態）に留まり、かつて頻繁に見られたレベル4（膜状に覆った状態）以上のアオコはほとんど発生していない。湖水のCOD値や栄養塩濃度に大きな変動はないが（残念ながら）、何らかの要因で生態系の構造が変化している可能性がある。水質保全計画に基づいた継続的な負荷対策のほか、気温上昇や記録的豪雨の発生など昨今の気象条件の影響を精査する必要があるだろう。アオコは目視で認識できるが、他の植物プランクトンやそれを捕食する動物プランクトン、さらに高次消費者の魚類などを含め、八郎湖の生態系全体の姿は変わってきているのか、関心を抱いている。

八郎湖では現在、第3期水質保全計画（令和元年度～6年度）による対策が進行中であり、水質保全型農業の普及促進や国営かんがい排水事業との連携による農地からの面源負荷の低減、湖内浄化対策の実施など、多面的な取り組みが実施されている。同時に、八郎湖の長期ビジョン「恵みや潤いのある“わがみずうみ”」が掲げられ、八郎湖から得られる恩恵－生態系サービスを持続的に利用した地域社会を目指した取り組みも課題である。水質改善は依然として大きな問題であるが、加えて生態系サービスの観点からの対策を強化する必要がある。このためには、八郎湖環境（水質、生態系構造、物質循環）及び八郎湖に関わりをもつ地域社会の変化を的確かつ継続的にとらえなくてはならないだろう。

さて「八郎湖流域管理研究」第7号では3編の論文を掲載している。秋田県立大学名誉教授・片野登氏には、「八郎湖および流入河川の水質の時空間変動について（2）」と題して、前号に引き続き、八郎湖及びその流入河川における長期的な水質変動を示して頂いた。秋田県八郎湖環境対策室・成田修司氏らには、「八郎湖に係る湖沼水質保全計画（第3期）の中間評価の概要等について」と題して、これまでの事業の検証と次の第4期計画に向けた取り組みの方針について示して頂いた。秋田県立大学生物資源科学部・谷口吉光氏らには、「地域資源共同管理のための農地GISマップの作成」と題して、三種町下岩川地区における土地利用状況の解析とその八郎湖流域管理における意義について述べて頂いた。

本誌の発行が、地域住民、行政・NPO関係者、研究者をつなげ、八郎湖の環境改善や地域の活性化、持続的発展を目指して協働する一助になることを期待しています。

秋田県立大学生物資源科学部

宮田 直幸